

## 発刊にあたって

伊木力川遺跡が発見されましたのは、昭和46年の春でありました。遺跡のある場所は当時耕地整理事業を着手中でありましたが、文化財の稀少な当町内にあって、その意義を把握し、広く町内外に顕彰することにし、県の文化課に緊急発掘を委嘱しましたところ、承諾を得ましたので当町で調査を主催することになったわけであります。

弥生時代の遺跡の一つが伊木力川遺跡ということですが、本県の場合は特異な形で成立したといわれ、それだけに学問上重要性を本遺跡が持つとされています。波静かな大村湾の一隅に、いずれにせよ古代文化の展開がありましたことは、私ども町民にとりまして、郷土の歴史の深さを思いおこさせ、歴史と自然の人間生活に及ぼすことの重要性を感じせしめずにはおかないものがあります。

このたび調査の成果を小冊子として刊行することになりましたが、今後の研究と郷土愛育成に少しでも資することができればと希うものであります。

昭和49年3月1日

多良見町町長 前田 正

## 発刊にあたって

このたび、本町内にある伊木力川遺跡の調査結果について報告書を刊行することになりましたが、調査は、町において、さる昭和46年5月に実施し、県文化課において担当していただいたものであります。

私ども人間は、いつも将来をみつめ発展していくものでありまして、今世紀の発展も広い将来への視野のなかで誕生したものであります。しかしながら、万能でない人間は、ときとして将来の展望を誤ることが皆無ではないことも自戒せねばならないところであります。今日、自然の回復と人間性の尊重がいわれておりますが、人間といえども自然界の一員であることを忘れてはならないことであり、同時に人間の作りあげた文明の将来については、人間の歩いてきた道程をみつめながら進めねばならないということでありましょう。

温故知新ということばがありますが、いままでのことを知らなければ、人間社会の本当の方向も見出せないところであります。その意味におきまして、この小冊子が、わが多良見町の将来を見つめるための一助となるとともに、文化財の保護という具体的な形へと目をむけるよすがとなりますよう念願する次第であります。

最後に、調査から整理、報告書執筆に至るまでお骨おりいただいた関係者に深く謝意を表するものであります。

昭和49年3月

多良見町教育長 中路孝重

## 例 言

1. 本書は、長崎県西彼杵郡多良見町に所在する伊木力川遺跡について多良見町が主催し、長崎県が調査の委嘱をうけて実施した緊急発掘調査の報告である。
2. 調査は昭和46年5月8日から同13日まで実施した。
3. 調査参加者は次のとおりである。  
(調査参加者：当時)  
長野 崇・蔭山 勇(多良町教委) 正林 護・田川 肇(長崎県文化課)。なお、多良見町消防団、同婦人会、同青年団、町当局の方々には直接間接にご苦勞いただき謝意を表す。
4. 遺跡の調査における実測は正林 護、田川 肇が当り、撮影は田川と正林が当った。
5. 整理作業報文執筆は次のとおりである。  
(遺物実測及びトレース)  
藤田和裕・高野晋司・正林護(県文化課)
6. 同じく写真撮影は高野晋司・藤田和裕により、編集は藤田・正林があたった。

# 目 本 文 目 次

I 調査の経過と目的	7
II 位置と地形	8
III 調 査	10
IV 出土遺物	
1. 土 器	15
2. 石 器	21
V 結 語	25

## 挿 図 目 次

第1図	多良見町位置図	9
第2図	遺跡付近地形図	10
第3図	遺跡発掘区域図	11
第4図	土層調査実測図	12
第5図	調査グリッド全体図	14
第6図	出土遺物実測図 (土器・I)	15
第7図	〃 (〃・II)	16
第8図	〃 (〃・III)	16
第9図	〃 (〃・IV)	17
第10図	〃 (〃・V)	18
第11図	出土遺物実測図 (石器・I)	21
第12図	〃 (〃・II)	22
第13図	〃 (〃・III)	24

## 図 版 目 次

図版1	遺跡遠景, 調査風景	29
図版2	調査区土層	30
図版3	遺物出土状況 (土器)	31
図版4	〃 (土器・打製石斧)	32
図版5	出土遺物 (土器)	33
図版6	〃 (〃)	34
図版7	出土遺物 (石器)	35
図版8	〃 (石器・土錘)	36



## I 調査の経過と目的

昭和46年5月、長崎県西彼杵郡多良見町<sup>にしそのぎ たらみ</sup>より、町内の埋蔵文化財包蔵地について分布調査の委嘱をうけて、同町の大村湾沿岸等について踏査を実施した。同町舟津郷<sup>いかりき</sup>（伊木力）において、当時、構造改善事業が進行中であり、踏査により発見した遺跡とともに、該事業進行中の沖積平野における包蔵地の発見が注目された。数日後、同町教育委員会の長野崇氏より、黒燿石等の資料発見が急報された。筆者が現場に急行したのは翌日であったが、工事現場の一隅における条溝中より、黒燿石片と弥生式土器が発見され、遺跡包蔵地が工事にかかることが強く予察された。

帰投後、長崎県文化課は、多良見町当局及び関係機関と、発見地点における工事中断と緊急調査の必要について協議をもった。交渉の結果、多良見町が緊急調査を主催することになり、同町長名で工事届と発掘調査届が提出され、同時に県文化課に調査が委嘱されることになり、昭和46年5月8日～同11日の5日間、調査が実施された。

長崎県では、離島を多くかかえ、海岸線の総距離は我国で最も長く、大まかであるが、東支那海沿岸に接する地域<sup>そとめ</sup>を外海、逆に、九州本島部側<sup>うちめ</sup>を内海と呼唱している。大村湾の沿岸は、西に、陸の孤島といわれた西彼杵半島をひかえ、東岸は大村市及び東彼杵郡のゆるやかな扇状地を望み、北方のみ西海橋下の急潮、伊ノ浦瀬戸によって「外海」に通じる袋状の内湾になっている。

多良見町は、この大村湾の南奥に北面し、全体として「内海」の一角をしめている。本県の弥生時代の遺跡を概観すれば、全体として、「外海」海岸及び離島部において、特異な態様で分布し、「内海」地方では、その数稀少である。この内海地方に属する大村市の扇状地と、それに続く沖積地や、諫早市地方は、平坦な地形をもって、一見、弥生時代遺跡の立地条件として好適であるやに見えるが、遺跡の数として、縄文時代前期以降、弥生時代の遺跡は、遺物採集地点を含めてもその数が稀少であり、次の古墳期のそれらは、逆の傾向にある。この状態は、きわめて興深いことであるが、弥生時代から古墳期の特異な態様は今後研究の条地を多く残している。従って、我々の前にあって大村湾沿岸の弥生期の遺跡については、十分調査の手がのびているとはいえない状態にあった。従前、この地域における弥生時代の遺跡は、諫早農校遺跡（中期）等、限られていた。我々は、内海地方における弥生時代の遺跡を調査すること自体に、研究の将来にとって意味をもつものと考えていた。

伊木力川遺跡の緊急調査は、前段の緊急性と、後段の学術性をもつものであった。

## II 位置と地形

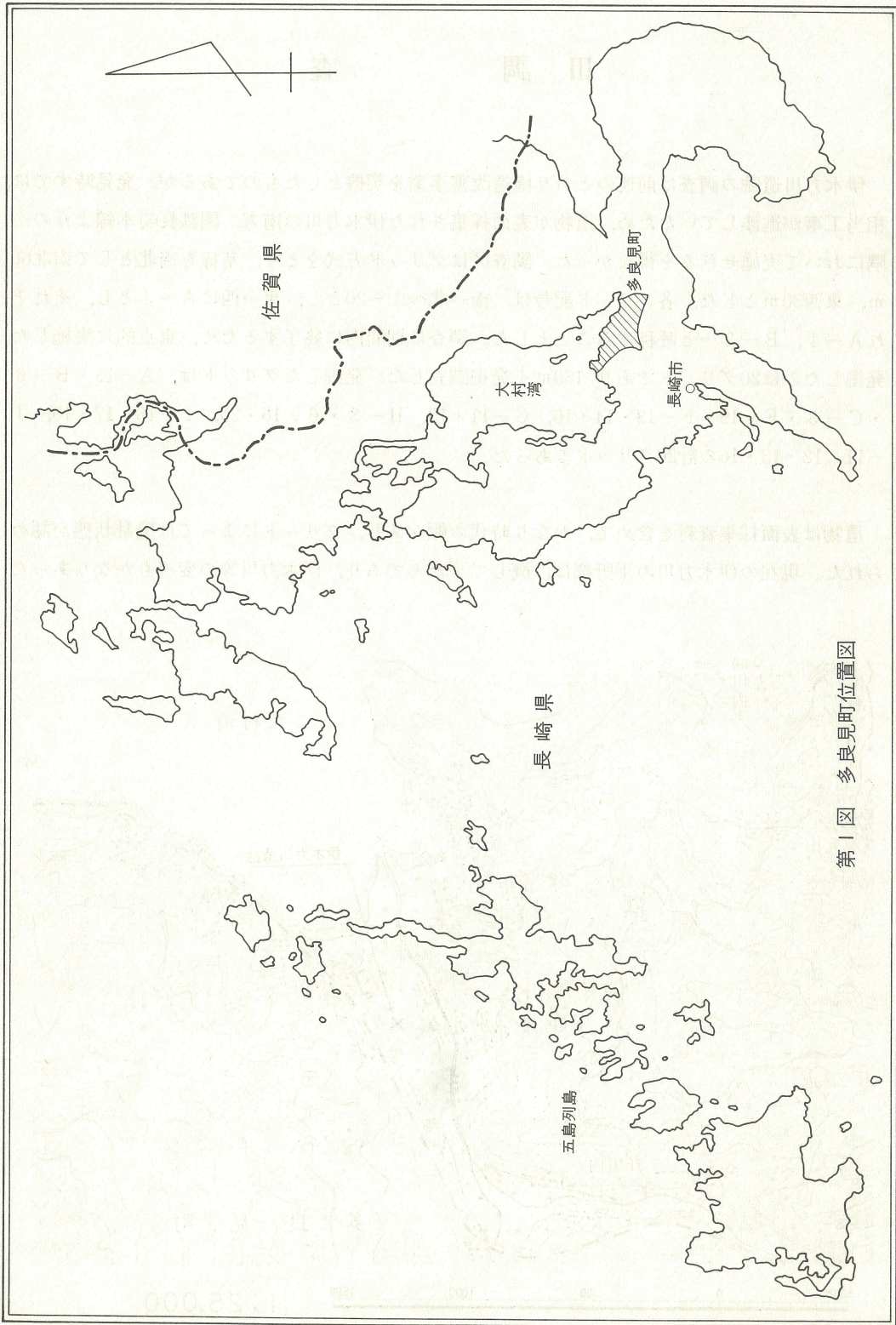
長崎県の大半の面積をしめる肥前半島は、その南部において、島原半島・西彼杵半島・長崎半島（野母半島）にわかれる。西彼杵半島は県下最大の半島であり、東に大村湾を距てて大村扇状地及び、佐賀県とを分ける多良岳を遠望する。この西彼杵半島と大村市及び東彼杵郡の間が大村湾であり、南北に長く、北端の西海橋下の急潮伊之浦瀬戸によって、わずかに東支那海に通じている。大村湾は平均水深20mの浅海で、風光にすぐれるが、いわゆる「内海」の呼称もここに生じる内湾である。伊木力川遺跡は、この大村湾の南奥部、多良見町にあり、現地は、大村湾に流入する伊木力川の小流によって潤される陝隘な沖積平野となり、海水面との比高は5～7mと低平である。大村湾の東岸一帯は大村扇状地と東彼杵郡一帯の沖積地により、ゆるく海没するが、多良見町を含む西岸一帯はロッキーコーストの連る海岸地形をなし大村湾に急没する地形が多く見られる。従って西岸一帯は、リアス状の海岸となり河川も倭少で沖積地も少い。本遺跡の所在する伊木力川流域の水田地帯は、このような地形の中で比較的好条件を有し、遺跡はこの僅かな平野部において成立したものと考えられる。

この陝隘な水田地帯は、その北側を東流する伊木力川と、南側を東流する小川によって現在潤されているが、土層の項で触れるごとく、包含層中に掌拳大前後の円礫を多く含み、かつ砂粘を多く含んでいる。従って、流路は、しばしば変流を操返し、下流に土砂を押し流したものと考えられ、調査区グリッドによっては、かなり遺物のローリングが激しく、遺物の時期差もかなり幅を見せる。

現時点では、この両流の間が比較わずかに高く、中洲状態があると考えられ、遺跡本来の中心は、調査地点より北寄りにあるとも考えられるが、そこまで調査できなかったことは、工事がすでに進捗していたという事情があつたにせよ、惜まれる。将来、この地において、再度調査の機が与えられれば、遺構等含めた包蔵状態に接し得るかもしれない。

同町内において昭和48年夏に緊急発掘の対象となった化屋遺跡も近隣の位置にあり、内海地方の弥生文化の研究にとって、伊木力川流域は枢要の地位をしめるものかもしれない。





第1図 多良見町位置図

### Ⅲ 調 査

伊木力川遺跡の調査は前述のとおり構造改善事業を契機としたものであるが、発見時すでに、相当工事が進捗していたため、遺物が表面採集された伊木力川の南方、国鉄長崎本線よりの一隅において実施せざるを得なかった。調査区はグリッド方式をとり、基線を南北として南北60m、東西30mとした。各グリッド記号は、南→北へ1～20とし、東→西にA～Jとし、それぞれA-1、B-2…と呼称することとした。調査は期間内に終了するため、重点的に実施した。発掘したのは20グリッドであり180㎡を発掘調査した。発掘したグリッドは、A-13・B-6・C-3・E-19・F-13・14・16、G-11・13、H-3・6・16・20、I-16・17・19、J-11・12・13・16の計20グリッドであった。

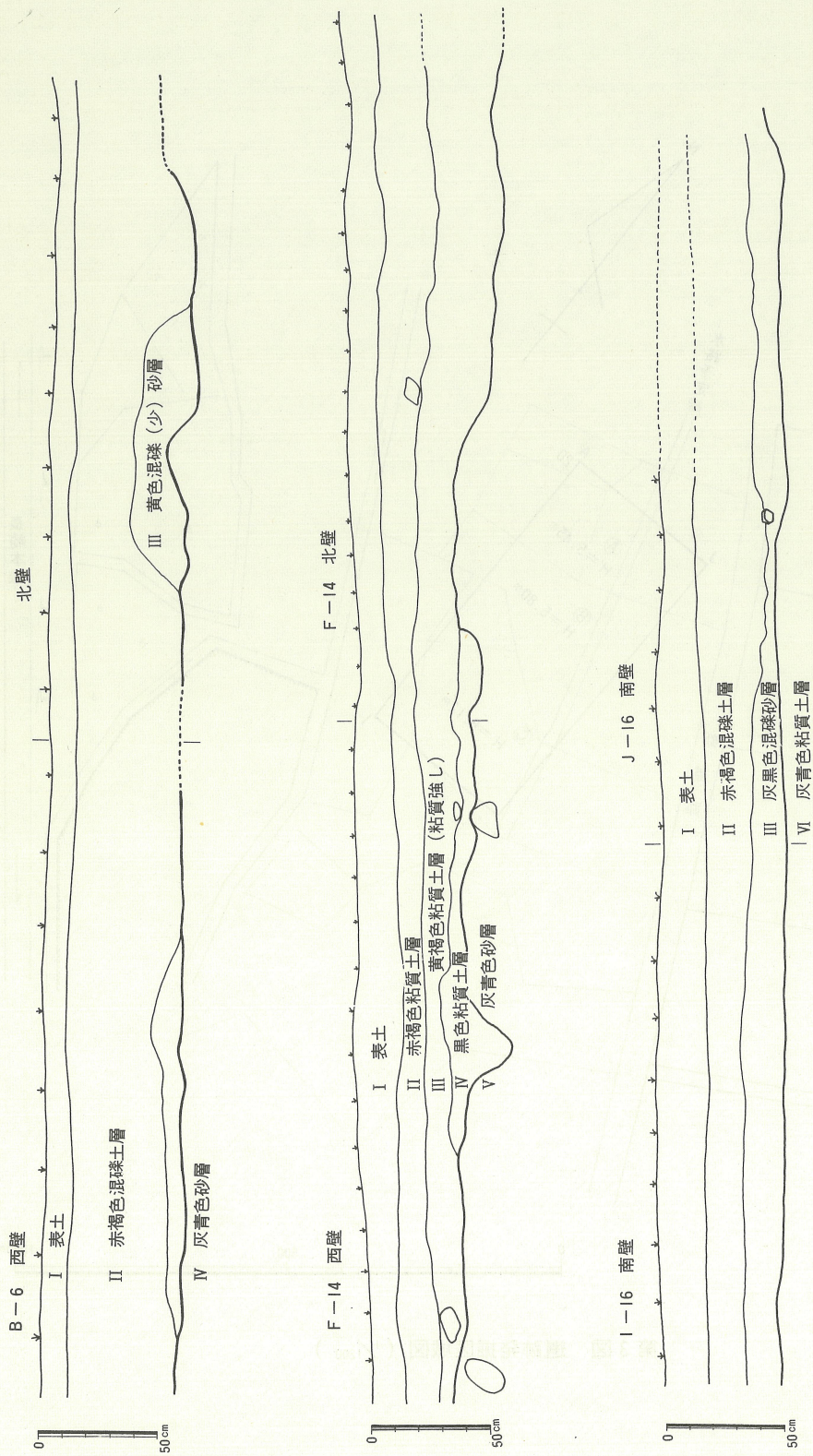
遺物は表面採集資料を含めて、かなり時代の幅があり、グリッドによっては攪乱状態が認められた。現在の伊木力川の平野部は、概して平坦であり、伊木力川等の変流もかなりあった



第2図 遺跡付近地形図



第3図 遺跡発掘区域図 (1/1200)



第 4 図 伊木力遺跡土層断面図 (1/30)

らしく、調査区の地点でも上流から礫や土砂が運ばれ、二次堆積の行なわれたことが認められた。調査した範囲においても、H～J列のあたりが整層状態にありA列、つまり東に近く攪乱状態が認められ、本来の遺跡の中心は、長崎本線の鉄道寄りにあったと考えられた。

## 土 層

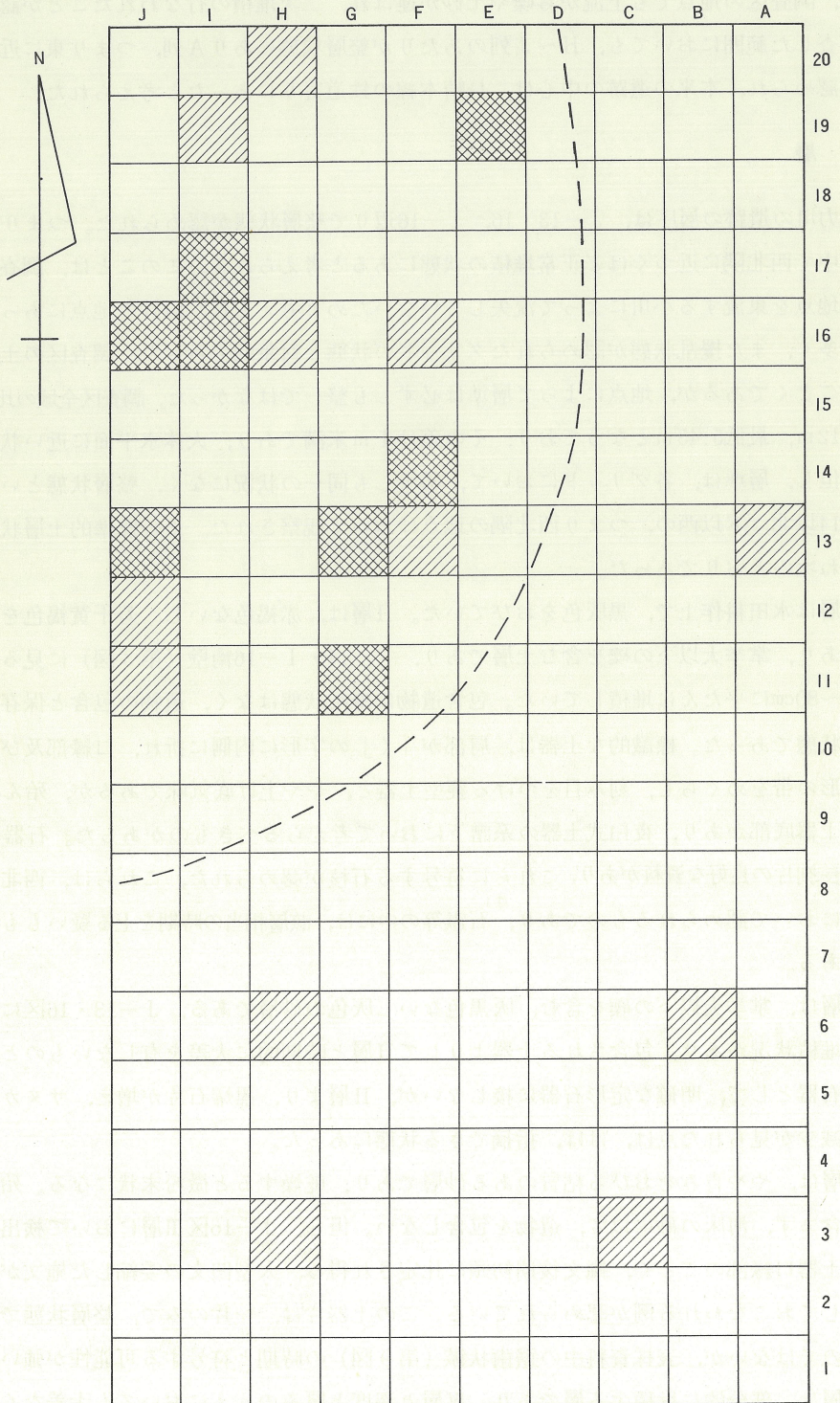
伊木力川の遺跡の層序は、J-13・16、I-16辺りで整層状態が認められた。つまり調査区全体の中で西北隅に近づくほど正常堆積の状態にあると考えられる。このことは、調査区の位置する地点を東流する小川によって流失していないためと考えられ、以外の地点にあっては表採資料多く、また攪乱状態が認められたグリッドの状態と対比的であった。調査区の土層は第3図のごとくであるが、地点によって層準は必ずしも整一ではなかった。調査区全域の比高差は、最高6.12m、最低5.45mとなっており、その差は1m未満であり、大体水平面に近い状態であった。但し、層準は、各グリッドにおいて、必ずしも同一の状況になく、整層状態といえるものは、14以北、F以西の、つまり西北隅の地点において観察された。その標準的土層状況は、おおむね次のとおりであった。

第I層は水田耕作土で、黒灰色をおびていた。II層は、赤褐色ないし、若干黄褐色をおびた土層であり、掌拳大以下の礫を含む土層であり、F-14・I-16南壁（第3図）に見るごとく、深度60～80cmに平たんに堆積していた。包含遺物に攪乱状態はなく、遺物の包含と保存もほぼ良好な状態であった。標識的な土器は、肩部が「く」の字形に内側に折れ、口縁部及び肩部に、断面台形の帯をめぐらし、刻み目をつける甕型土器と、やや上げ底気味であるが、殆んど平底に近い土器底部があり、夜白式土器の系譜下において考えらるべきものがあつた。石器としては、縦長剥片の良好な資料があり、これらに符号する石核が認められた、これらは、西北九州の縄文期において認められるものであり、<sup>註1</sup>石鏃等の中には、該層相当の時期を上る疑いももたれるものもある。

第III層は、掌拳大以下の礫を含む、灰黒色ないし灰色の砂層である。J-13・16区において良好な堆積状況があり、包含される土器よりしてII層と時期的に大差を有しないものと考えられる。石器として、明確な定形石器に接しないが、II層より、黒燿石片が増え、サヌカイト質石片の減少が見られた点は、ほぼ、指摘できる状態にあつた。

第IV層は、やや青みをおびる粘質のある砂層であり、乾燥すると微粉末状になる。殆んど有機物を含まず、河床の砂に以て、遺物を包含しない。但し、J-16区III層において検出した第7図の土器口縁部のごとく、縄文後期初頭に比定され得る、太型凹文の委縮した施文が、口唇に集中しておこなわれる例が認められている。この土器片は、一片のみで、整層状態で検出されたものではないが、表採資料中の鋸歯状鏃（第9図）の時期と符号する可能性が強い。

第V層は、部分的に堆積する層であり、IV層と深度と厚みのうえにおいても大差なく、同一視してもよいと考えられる。



第5図 調査グリッド全体図  
(各グリッド3m×3m)

## IV 出土遺物

### 1. 土器 (第6図~10図, 図版5, 6)

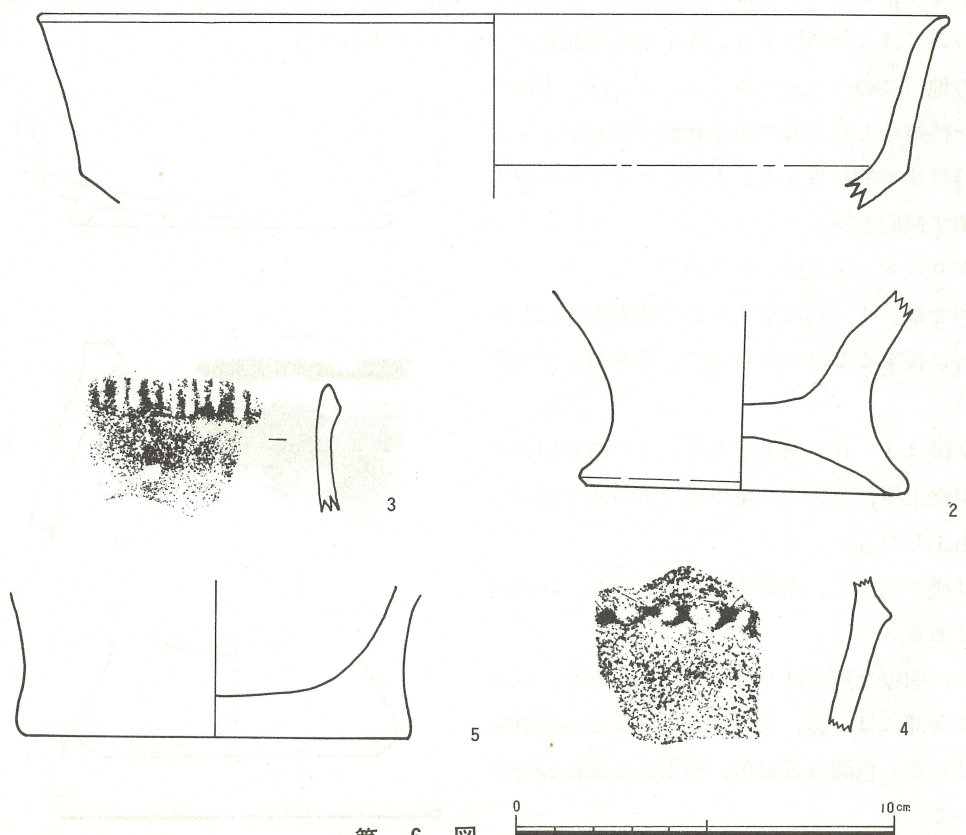
出土した土器には、総体的にローリングした小破片が多く、従って良好な資料に乏しい。又、その型式も多岐にわたり、攪乱状態の強い本遺跡に於いて、比較的層位を確認し得るのは、調査区の西北部分、すなわち、J-13, 16, I-16等、数カ所のグリッドにすぎない。

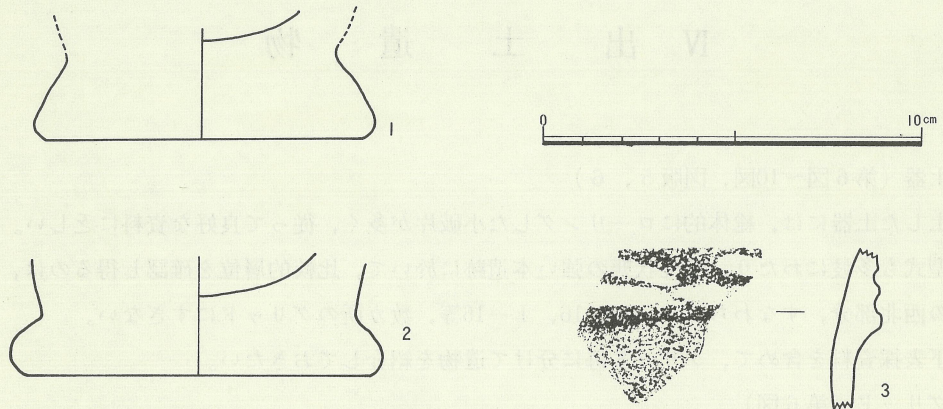
以下表採資料を含めて、グリッド毎に分けて遺物を紹介しておきたい。

#### Fグリッド (第6図)

F列に於いて、遺物の層位を比較的良好に観察できるのは、F-16, 及びF-14の2カ所である。図の資料は、この両グリッドよりの出土であるが、その層位に大きな変化は認められないので、一括して紹介しておく。

1はF-14の表土内出土である。壺の口縁部で、頸部から口縁にかけて強く屈曲し、口辺部は僅かに外反する。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。





第 7 図

2は甕の底部である。下部のくびれが大きくあげ底を呈する。色調は暗褐色で、胎土には若干の雲母片を含んでいる。弥生中期でも古い要素を残していると言えよう。

3, 4, 5はいずれも第V層直上の出土である。3, 4の特徴は、口縁部、及びくの字に屈曲する上胴部と下胴部の部分に突帯を附し、その上に刻目を巡らしている事である。

以上より、1については、弥生後期、2は弥生中期、3, 4は縄文晩期末である夜白式土器、5については、その形より、弥生前期に比定できるものと思われる。

その他、このグリッド内では、それぞれ上記の形式を標識とした土器の出土状態であるが、下部の土器は比率的に少なく、上部にかけてその量を漸次増す傾向を持っている。

Jグリッド (第7図, 第8図)

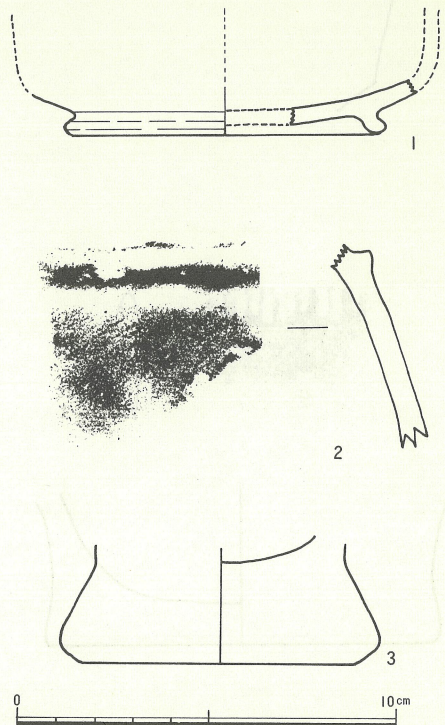
J列では、J-16及びJ-13で時期を確認し得る資料に接するだけであるので、順をおって紹介したい。

第7図はJ-16の出土である。1が第II層の赤褐色混礫土層、2, 3は第III層である灰黒色砂層より出土したものである。

1は甕の底部で、赤褐色の色調を有し、比較的厚底である。

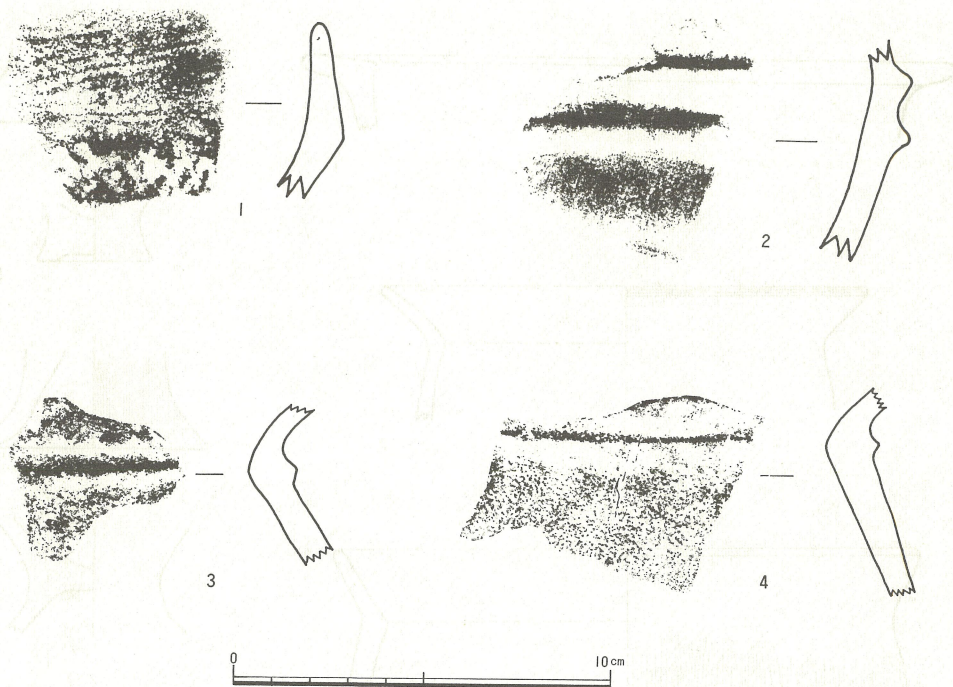
2は、明瞭な円盤貼り付けの底部であり、胴部との接合部には、篋、又は指頭等による調整痕を残している。色調は黄褐色、胎土には細粒砂を含んでいる。

3は上端を若干欠損しているが、深鉢の口縁部



第 8 図





第 9 図

と思われる。口縁にほぼ近く太形凹文を施している。この種の土器片はこれのみである。

以上より、1, 2については夜白式土器、3は縄文後期に比定できようが、3の土器をもって、Ⅲ層の時期を決定するのは無理である。

なお、この外にも上層部に於いて、弥生土器片が見られるが、いずれも小砂片であるので、ここでは割愛した。出土した土器の量は、上層が多く、下層は少ない。

第8図はJ-13出土の土器片である。

1は表土内よりのもので須恵器の杯身である。いわゆる生焼け状態で、色調は薄い茶灰色を呈している。古墳末期、7世紀後半頃に比定できよう。

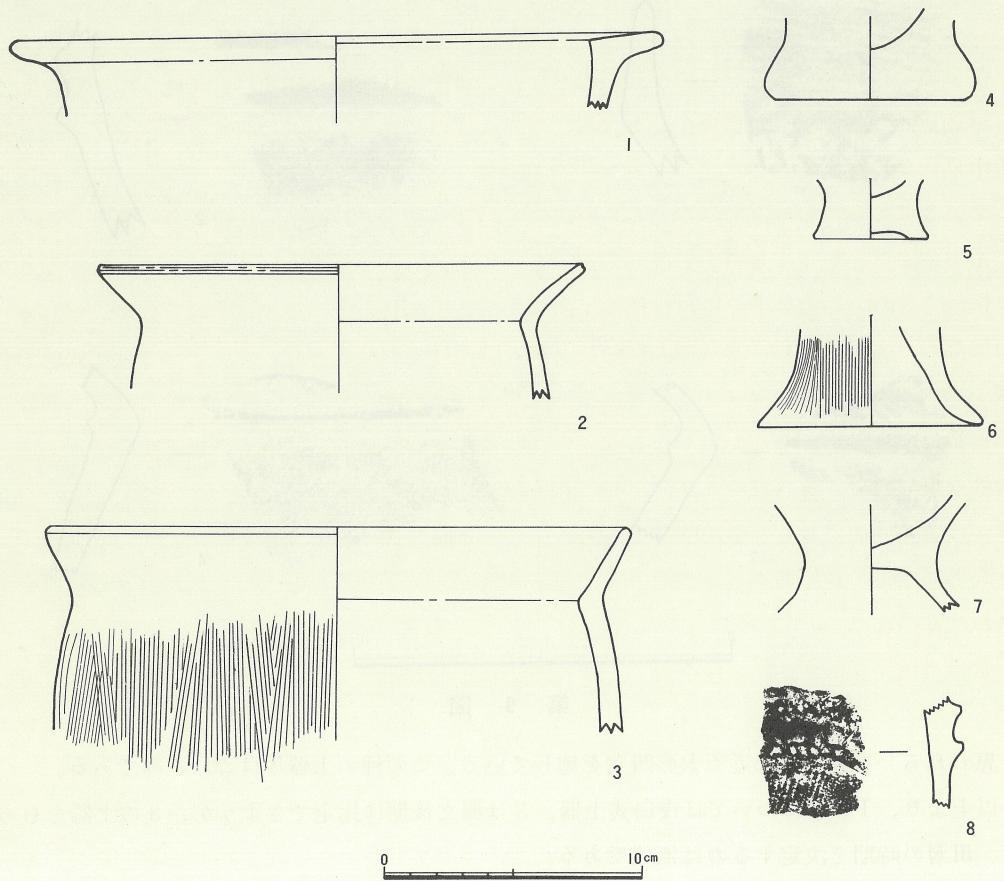
2は壺の胴部と思われる。肩部上半に一条の断面三角形の突帯を有している。焼成は良好で比較的薄い器壁を持つ。色調は黄褐色。第Ⅱ層よりの出土である。

3は、甕の底部である。胎土には細粒砂を含み、黄褐色を呈している。焼成は不良でかなりもろい。第7図-1の底部と共通するものであるが、ここでは第Ⅲ層より出土している。

その他、このグリッド内の土器の出土状態も、既述の例と同じく、その絶対量は、上層内により多く含まれている。ただ、1の須恵器片と同種のものとしては、F-14の第Ⅱ層より、1片のみ出土しているが、器面の磨耗が激しい為、詳細は不明である。

I グリッド (第9図)

図は全てI-17出土のものである。このグリッドを含めて、概してI列には良好の資料が少ない。



第 10 図

1 は表土層よりの出土で壺の口縁部である。第 6 図-1 と同タイプのものであろうが、時間的には、この方が一時期先行するものと思われる。頸部に文様らしきものが見られるが、これは、不定形な凹凸面であり、文様を意図したものというより、成形上の不手際によるものであろう。なお、口辺部には、横に刷毛目の調整痕が見られる。

2 は壺の胴部と思われる。断面三角形の突帯を二条施している。色調は黄褐色で焼成も良好である。

3, 4 は共に甕の口辺部である。いずれも胴上部より強く屈曲外反して口縁に向い、その反転部には一条の突帯を巡らしている。色調は共に赤褐色を呈し、焼成も良好である。いずれも弥生中期中葉に属するものであろう。なお、出土層は 2, 3, 4 は共に第Ⅲ層である灰黒色混礫砂層である。

この他、甕の底部、あるいは胴部等の破片の出土があるが、いずれも細片であり図として掲載はしなかった。

表採、及び層位不明資料 (第10図)

この遺跡に於いて量的に多いのは表採資料及び攪乱層よりの出土資料である。

ここでは、それらの中から幾つかのタイプを選出し若干の説明を加えるに留めたい。

1は甕の口縁部である。ほぼ平坦口縁をなし、器壁には明瞭な刷毛目痕を残している。胎土には細粒砂と共に若干の雲母片をも含み、焼成は極めて良好で色調は明るい褐色を呈する。弥生中期前葉に比定できよう。

2, 3共に甕の口縁部である。この型式のものは、表採資料の中に比較的多く見かけるものである。2は、かつて丹彩を胡塗してあったが如き、明るい色調を呈する。胎土にはかなり荒い粒砂を含む。器肉は薄く、口縁部には面を作り、篋先状のもので中に沈線を施す。胴部より口縁部への屈折は強い。器壁の表面及び内側に刷毛目の調整痕を有している。3は赤褐色の色調を呈し、胎土にはやはり2ほどではないが荒い粒砂を含んでいる。胴部から口縁部へかけての屈折はゆるやかで胴部の張り出しも弱い。器壁には内外両面とも刷毛目痕が明瞭で、又、二次的な煤の附着がみられる。2, 3共に弥生後期に比定されよう。

4は甕の底部である。第7図-1, 第8図-3と同型式のものである。

5も同じ甕の底部であるが、若干あげ底を呈する。図よりみると、高さ25cm内外の小形甕と思われる。

6は小破片であり、詳細は不明である。脚部の延長も期待できない所から、脚台付鉢の可能性もある。赤褐色を呈し、下部には縦方向にかすかな刷毛目痕を残している。弥生後期後葉に比定されている、熊本県本目<sup>注1</sup>、市房隠等の出土品に酷似している。

7は、杯の胴と脚の接合部分である。黄褐色を呈し、胎土は緻密で焼成も良好である。杯身の弯曲はスムーズに脚部に移行し、接合部の丁寧さを感じさせる。又、脚の裾部と杯身のカーブは相対形をなし、その拡がりからみると、脚部はあまり延びない事を示している。北九州のものよりも、むしろ、先きの熊本出土の免田式後半の脚台附鉢に類似しているようである。<sup>注2</sup>

8は壺、又は甕の胴部である。かなり突出した断面三角形の突帯を2条附し、その上に刻目を施している。弥生中期中葉に比定されよう。

以上、出土土器を俯瞰してきたわけであるが、図示した土器片をグリッド毎にわけて、その上下関係を表にすると以下のとおりである。

グリッド名 層位	F - 14 16	J - 16	J - 13	I - 17
	∨	∨	∨	∨
I 層 (表土)	壺口縁部 (第6図-1)		須恵器片 (第8図-1)	壺口縁部 (第9図-1)
II 層 (赤褐色混礫土層 " 粘質土層)	甕底部 (第6図-2)	甕底部 (第7図-1)	壺胴部 (第8図-2)	
III 層 F→黄褐色粘質土層 J→黄色混礫砂層 I→灰黒色混礫砂層		甕底部 (第7図-2) 甕口縁部 (第7図-3)	甕底部 (第8図-3)	壺胴部 (第9図-2) 甕口辺部 (第9図-3) 甕口辺部 (第9図-4)
IV 層 (黒色粘質土層)	甕底部 (第6図-5) 甕口縁 (第6図-3) 甕胴部 (第6図-4)			
V 層	////////////////////			

表からみると、層位による大体の時期の把握が出来るようである。つまり、F-14, 16に於ける第IV層、J-16, 13, I-17に於ける第IIIは縄文晩期末葉の夜白式併行の時期、そして、それぞれ第II層は弥生中後期以降の時期に比定されよう。

しかし前述した如く、各グリッドに於いても、下層にいくにつれて、その出土量が乏しく、一応、各時期の土器の出土はあるにしても、少なく共、調査区域内に於いては、土器型式による明瞭な連続はとらえ難い。つまりこの区域では、第IV、あるいはIII層とII層との間には、時間的空間があったものと思われる。

ただ出土した土器の総数は、むろん図示した分の数十倍にのぼるが、総体的にその量は少なく、これは他に遺構らしきものの存在が見られないことからしても、この区域が遺跡の中心ではない事を物語るものであろう。(高野)

注1 弥生式土器集物 本編I 日本考古学協会 昭39年

注2 同上

石器 (第11図～第13図)

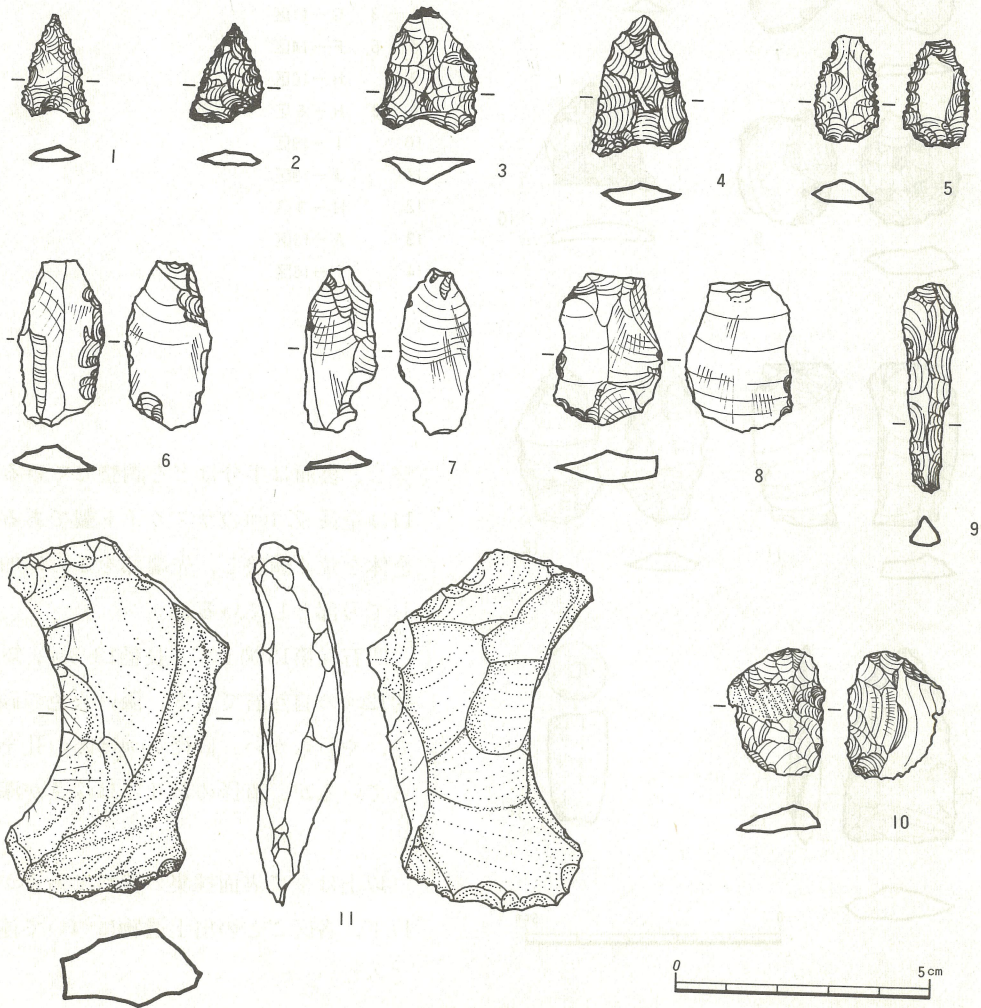
表面採集資料 (第11図, 第13図)

石鏃 (第11図1～5) すべて黒耀石を素材として用いている。どれもが部分的に欠損している。1, 5はいわゆる鋸歯状鏃と呼ばれるもので, 5は灰黒色の黒耀石で作っている。

縦長剥片および使用痕のある剥片 (第11図6～8) 6は全長3.3cm, 幅1.7cm, 7は全長3.2cm, 幅1.4cmの黒耀石製縦長剥片である。6には両側縁に使用の痕が残る。8は全長2.95cm, 幅2.05cmの剥片である。灰黒色の黒耀石を使用しており, 側縁に使用の痕が認められる。

石錐 (第11図9) 現存長4.1cmで, 先端部を欠失している。断面はほぼ正三角形に近いが, 稜はさほど鋭くはない。黒耀石製である。

エンド・スクレイパー (第11図10, 11) 10は小形の黒耀石製である。表面をていねいに調



第11図 石器実測図 (表採) ( $\frac{2}{3}$ )



- 1 ~ 3 G-11区
- 4 ~ 6 F-14区
- 7 H-16区
- 8, 9 H-6区
- 10 I-19区
- 11 J-13区
- 12 H-3区
- 13 A-13区
- 14 I-16区

整し、裏面は半分ほどを調整している。  
 11は全長 7.1cmのサヌカイト製である。  
 全体を荒く調整し、先端部をさらに加工  
 して刃部としている。

凹石（第13図1） 長軸13.3cm，短軸  
 約12cmの自然石である。淡い灰色の砂岩  
 で、やわらかい。直径7cmほどの孔を穿  
 っているが、直径のわりには深さが深い。

以上は全て表面採集の資料であるが、  
 以下、各区ごとの出土遺物について述べ  
 てみたい。

第12図 石器・土銀実測図 (2/3)

#### G-13区 (第12図1~3)

1~3ともに表土の攪乱層からの出土である。1の石鏃は黒耀石製で、脚の一端を欠損している。2は厚手の縦長剥片で長さ3.8cm、最大幅2.1cmを計る。一部に自然面を残しているが、両側縁には使用の痕跡が認められる。3も使用痕のある剥片である。灰黒色の黒耀石で、多くを欠損しているが、一側縁に使用痕が認められる。

#### F-14区 (第12図4~6)

5が表層の攪乱層からの出土で、4は灰色混礫砂層(上部)から、6は灰色砂層からの出土である。4の石核は側面に一個所、縦長の剥片を取った痕があるが、他の側面は全て自然面を残している。上部には3方向からの大きな剝離面を残している。5は長さ2.3cm、幅1.8cmの剥片である。上・下端部に自然面が残る。側縁に使用痕が認められる。6は長さ2.1cm、幅1.7cmで、先端部に加工の痕が認められる。以上、三点とも黒耀石である。

第13図3は打製石斧である。質の荒いサヌカイトを材量としており、一部に原石の表面を残している。刃部を少し欠損しているが、ほぼ完形に近い。長さ9.7cm、幅4.4cm、厚さ1.9cmを計る。灰黒色混礫砂層からの出土である。

#### H-16区 (第12図7)

表層の攪乱層からの出土である。かなり整った感じの黒耀石製の縦長剥片である。全長3.2cm、幅1.7cmを計る。両側縁と先端部にかなりの使用痕が認められる。

#### H-6区 (第12図8, 9, 第13図2)

8, 9ともに表層の攪乱層からの出土である。8は長さ2cm、幅1cmの縦長の剥片である。両側縁に使用痕が認められる。9は小形のエンド・スクレイパーで、長さ2.2cm、幅1.9cm、厚さ5.6mmを計る。表面は縁部から調整し、裏面は半分ほどを調整している。先端部に使用痕がある。8, 9ともに黒耀石製。第13図2は砥石と思われる。黄灰色の砂岩質の自然石を割り取っている。砥ぎの面と思われるのは一個所である。

#### I-19区 (第12図10)

いわゆる三角鏃といわれるもので、ほぼ正三角形に近い形状を呈するが、脚の端部を欠失している。黒耀石製である。

#### J-13区 (第12図11)

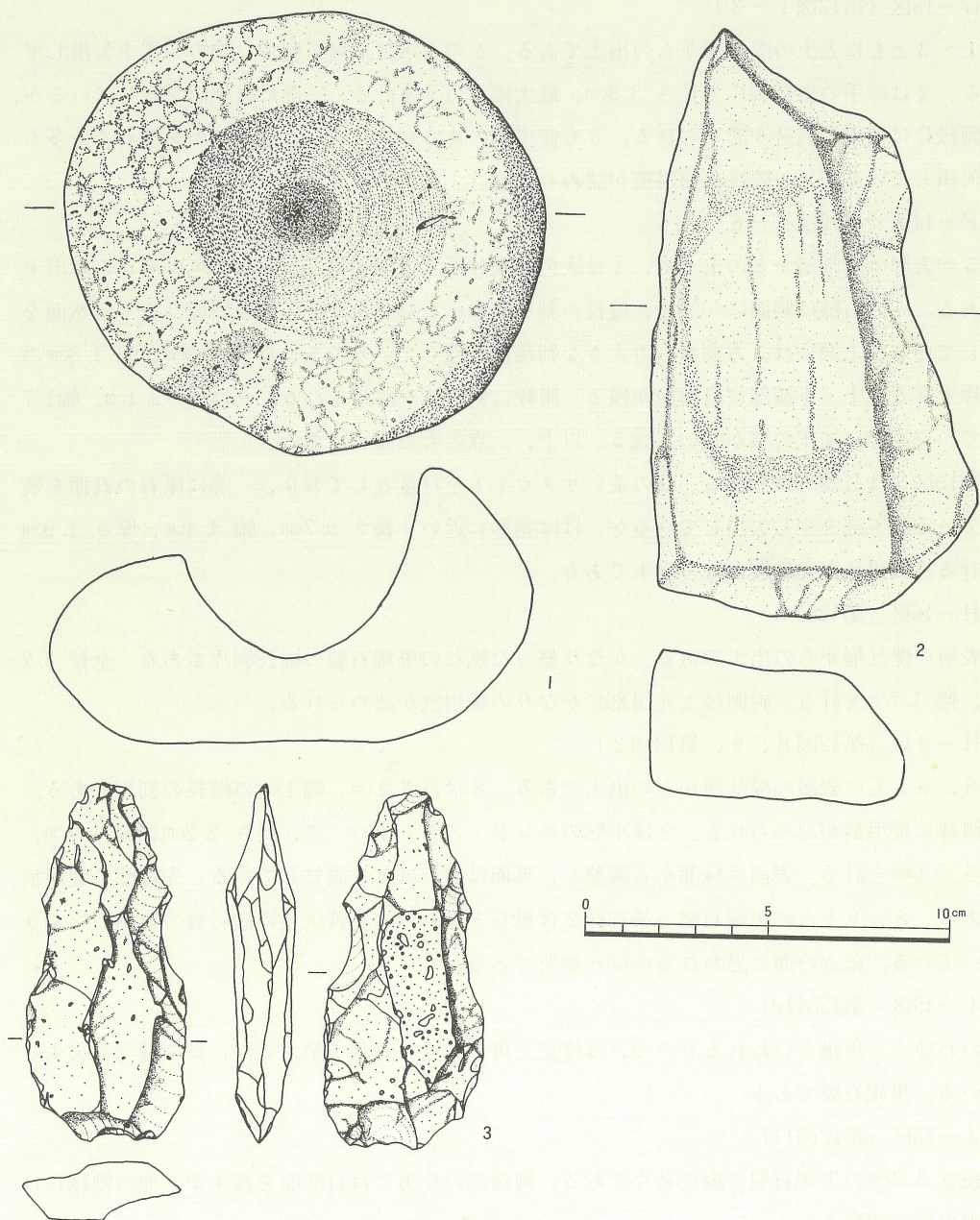
長さ3.2cmの黒耀石製の縦長剥片である。側縁部の片方には自然面を残すが、他の側縁には使用の痕が観察される。

#### H-3区 (第12図12)

長さ3.1cm、幅1.6cmの黒耀石製の剥片である。側縁に使用痕が認められる。灰色砂礫層(上部)からの出土である。

#### A-13区 (第12図13)

灰色混礫砂層出土の石鏃である。黒灰色の安山岩質の石材を使用している。全長3.8cm、最大幅2.2cm、厚さ6.5cmを計る。先端部をわずかに欠損している。



第13図 石器実測図 (1/2)

I-16区 (第12図14) (図版)

赤褐色の素焼きの土錘である。直径 1.2cm, 長さ 2.2cm。直径約 3mm の孔を約 3mm の孔をもつ。近年まで漁業に使用した土錘と考えて間違いないものと思われる。



## 結 語

伊木力川遺跡の緊急調査は、着工中に行われたということで、調査地点の送定が不可能であり、必ずしも意を尽し得たものとは考えられず、開発行為の原因によって行われる調査の限界を痛感したことであった。また、それだけに、着工中の工事を中断し、工程を変え、原因者負担をあえてしての開発側の配慮も大変な事であったといえる。その点において、調査前の諸調整の労をとられた、地元多良見町町長ならびに当局者、特に教育委員会諸氏の努力は大変なものであった。

稿初めに述べたごとく、大村湾沿岸を中心とする、いわゆる内海地方<sup>うちみ</sup>における長崎県下の弥生時代遺跡の様相は殆んどあきらかにされていない。そのことは、未発見の例を含めて遺跡自体の例数少なく、弥生期の様相を系統だてて追求する段階に至っていないことを意味するものがあつた。このことは、伊木力川遺跡の出土資料を見ても、弥生時代遺物を中心としながらも、なお縄文時代的色相をおび、いわゆる“米作り”の行われた様相を具現しえない段階にあることを示していると言えよう。勿論、縄文時代から弥生時代への過激的移行を示す資料に接し得たことは、最近、東隣の諫早市風観岳の支石墓群遺跡から表面採集された、夜白系の土器の例と併せて、長崎県中部地域で弥生文化の萌芽を見ることになり得たわけで、この点特筆されてよいと考えられる。このことは、伊木力川遺跡の所在する多良見町内で、化屋石棺群<sup>けいやく</sup>が発見されたこととあいまって喜ぶべき調査であつた。

しかしながら、長崎県中部地域において、風観岳、伊木力川の夜白系土器に後続する遺跡は、諫早市の農業高校遺跡<sup>①</sup>、同市小栗A、B遺跡<sup>②</sup>、同市長田小学校貝塚<sup>③</sup>以外に接し得ない。このことは、水田耕作への順応という社会変革の行われ難い地形状況との関連を予察させるものがあり、一つの視点として今後に研究課題を託されよう。またこのことは、内海地方以上に“米作り”に不適な、東支那海沿岸や離島各地において、態様はともあれ弥生期の遺跡数が多く、逆に古墳期の遺跡分布は内海地方には多く、外海地方においては、遺物すら稀少であるという現実を考えさせるものがある。このことは、“米作り”が広く行われる弥生時代中期の文化が、海岸線で停滞し、逆に古墳期の文化伝播が、長崎県内海部において地方色を残し、沿岸部に伝播し得ないという、文化伝播の方向と限界を暗示しているといえよう。

その意味において、伊木力川遺跡の調査はきわめて興あるものであつたと言えよう。

注① 諫早市出土の銅剣(正林 護)九州考古学41~44, 1971

注② 昭和47年11月、長崎県教育委員会による緊急発掘調査が行われた。報文末刊

注③ 全国遺跡地図長崎県版No.97

## 編 集 後 記

伊木力川遺跡の調査を担当してから3年間近く経過した。遺跡発見はたまさかの機会においてであり、緊急調査ということの性質上、十分に期間がとれなかった点と、各地の緊急調査に追われたという実状はあったにせよ、報文刊行までの体制と3年間の遅延については自戒されねばならないであろう。

今日、自然や文化財の保護がさげばれており、法律的にも、保護のための規制を強化しようという方向がある。一面結構なことではあるが、本来、自然や文化財を無秩序な損壊から守ろうということは、人間本来の欲求のようなものである。したがって、現在の文化財の保護強化の動きが、一時的なものでなく、人間にとって空気と同じようなものであるとの認識が徹底するまで続けられることを願うものである。

報文を3年ぶりで編集するにあたり、調査の計画から関係方面との交渉、調査への直接参加、更にはこれらの経費を含めて、細大の努力を傾倒された多良見町町長さんはじめ当局者、直接これらのことを担当された町教育委員会の方々、わけても、宿舎まで提供していただいた町教委・長野崇氏と同氏の円満寺御院の皆様には、報文の遅れたお詫びと、謝意を表する。

(昭49.3月 正林 護)

版 圖





遺跡遠景（南西から 海は大村湾）



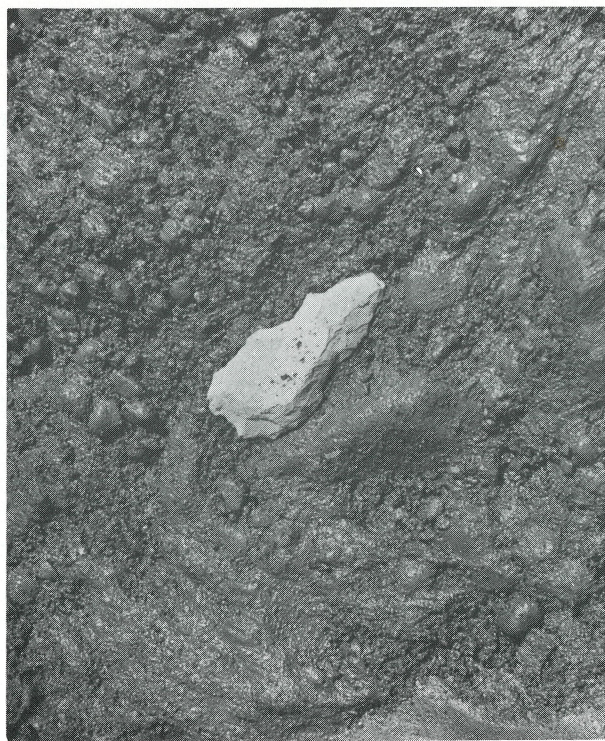
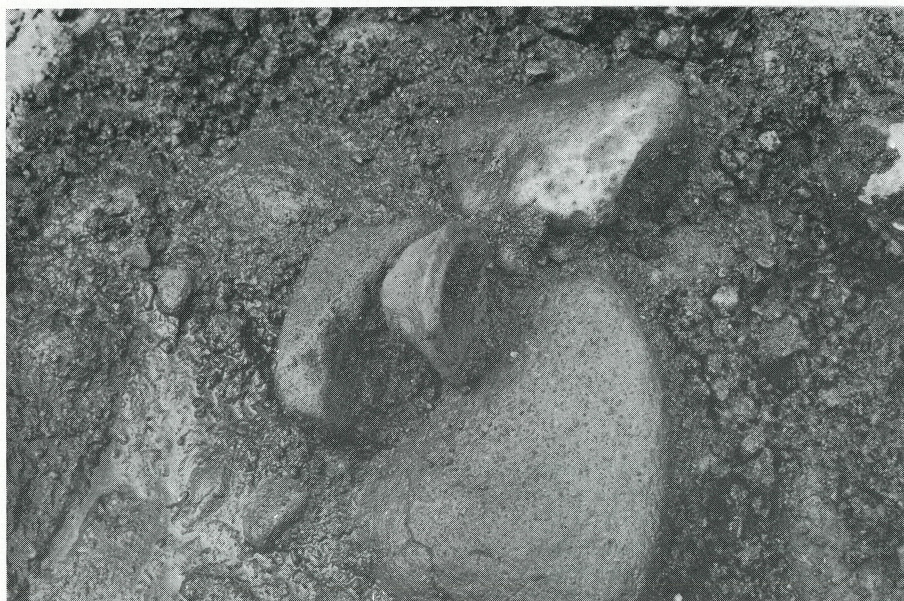
調査風景



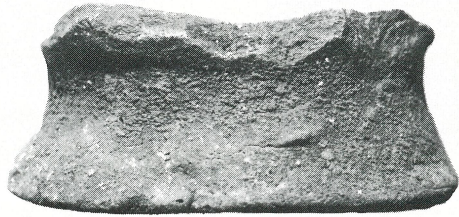
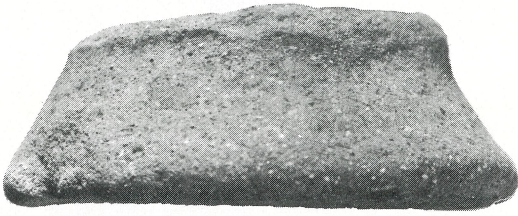
図版3 遺物出土状況(一)

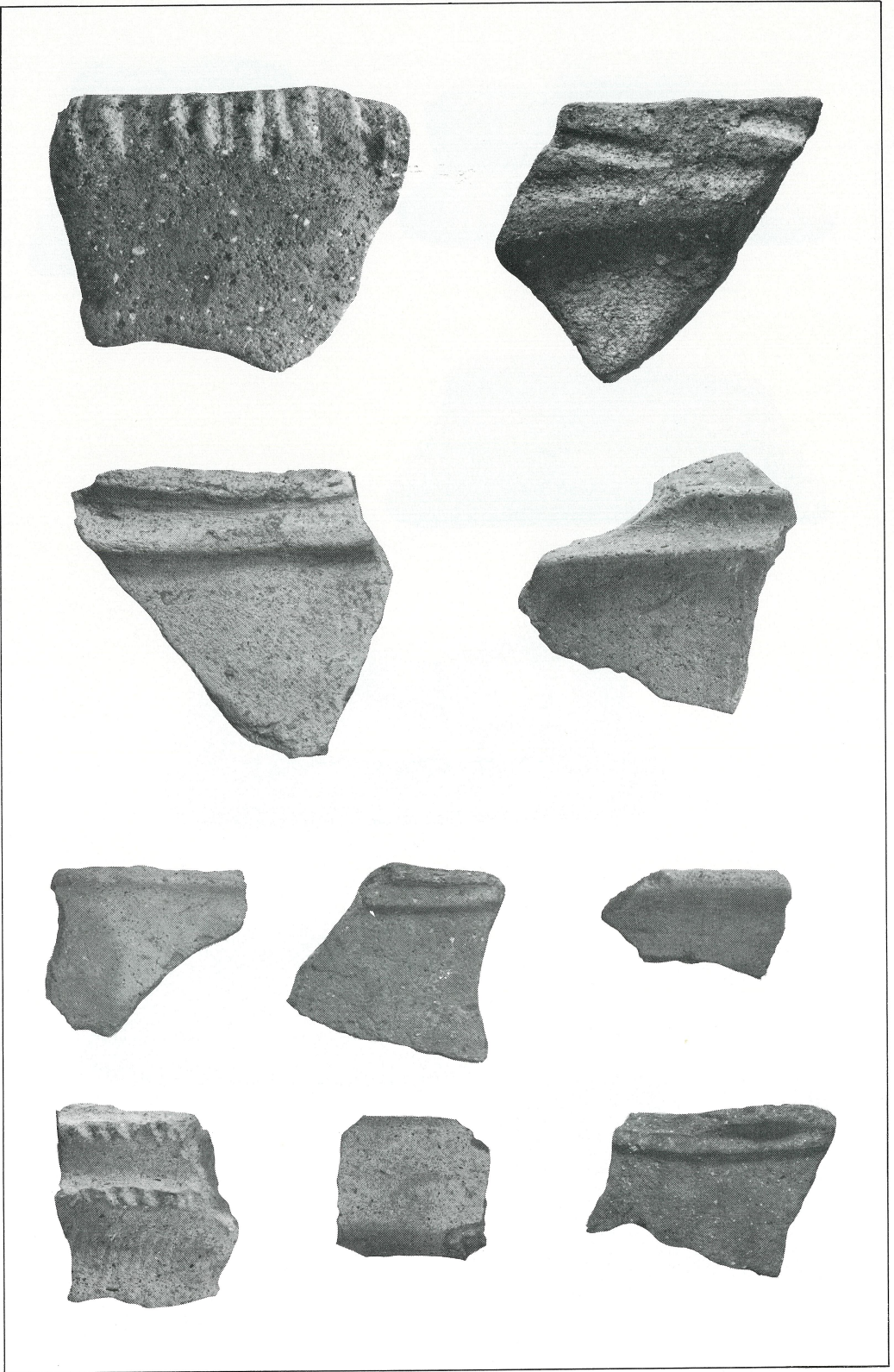


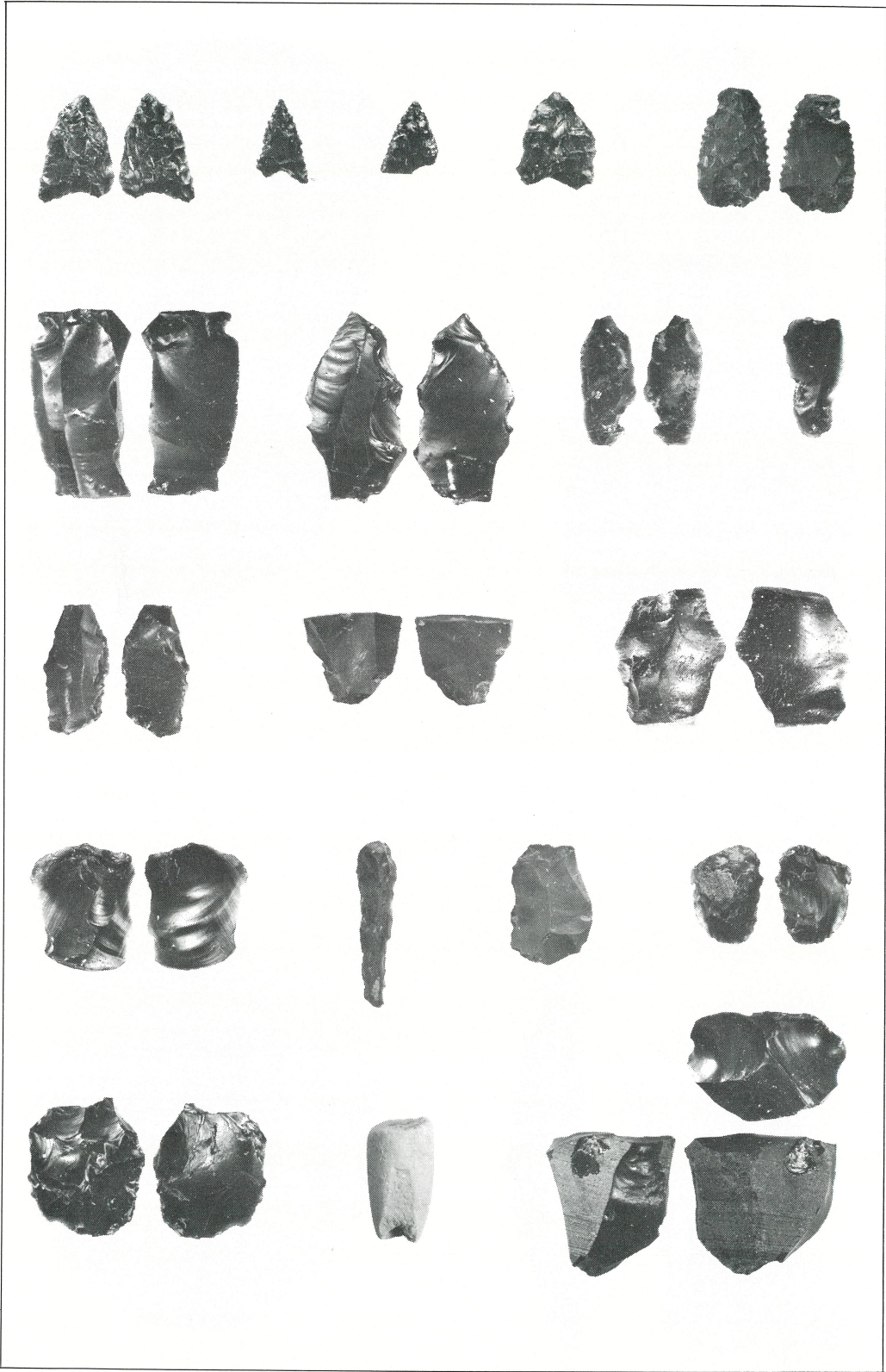
図版 4  
土器・石器の出土状況

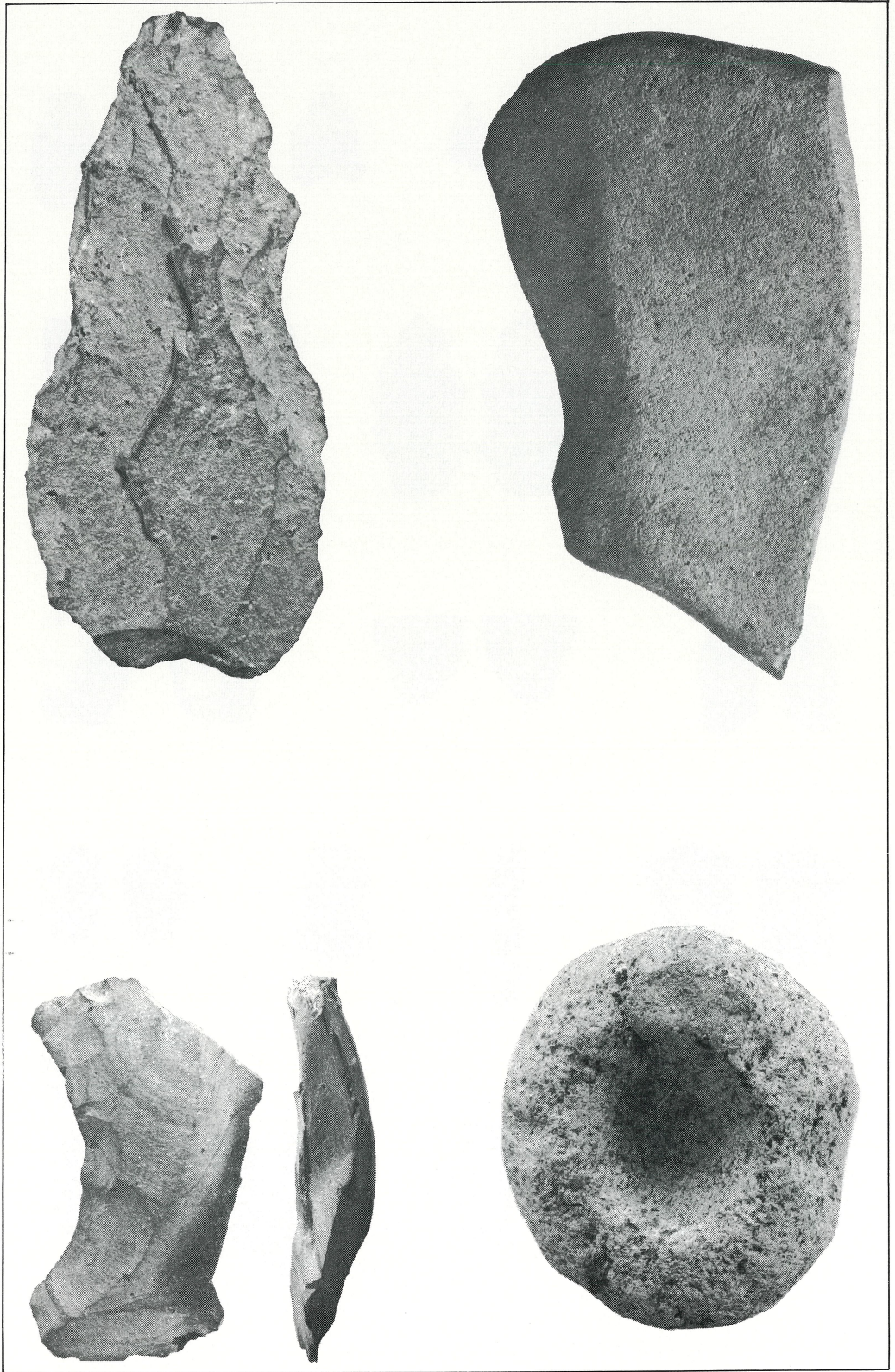












# 伊木力川遺跡

多良見町文化財調査報告書 第1集

昭和49年3月31日

発行 多良見町教育委員会

印刷 (有) 昭和堂印刷

諫早市東部厚生町622-4  
電話 代表 2-6000

